

は沉醉油断のうへ終に討たれ、隨從の兵共必死に働くといへ共悉く討死す。松田が馬捕三右衛門只一人遁れ出で、主人の馬に打乗り走歸る。かくて須崎は松田を討取りて大きに悦び、勢ひに乗じて松田が本城なる田井城をも攻取るべしと、大軍を率し攻懸る。三右衛門立歸り、主の討死を告げしらせ、防戦をはげますといへども、士卒共大將の討死に氣を落し色を失ひ、城を捨て、逃走る。残り留る者共漸く二拾人許、其上石浦の砦もはや攻落されけん、餘煙天を掠めけり。松田が妻茫然として途方を失ひ、此上は尋常に自害して、夫の死出に伴はんといふを、三右衛門、然る時は彌、敵に利を得さすべし。所詮爰を遁れ出で給うて、重て仇を報い給へかしと争ひ諫め、主人の妻子を伴ひ越中へ赴き、荒木と云ふ所に住居して、後に名を荒木六兵衛と改む。高德公越中へ發向の時、右の由緒を聞召し、甲斐々々敷忠義の士なりと感じ思召し、召出され家祿千石下し給ふ。と見ゆ、三州志變彙餘考には、此時松田の堡障も攻屠らる。松田に妻子あり。是を松田が舎人三右衛門携へて越中に走り、荒木と云所に隠し置く。其の子孫六郎兵衛一作右衛門

といふ者に至りて、高德公越中へ發向し給ふ時、城端にて天正十七年に笠仕、采地千石を賜ふ。即ち今の荒木善太夫の祖と云ふ。とあり。加賀古跡考に、田井村道場聖徳太子の事を記載して、松田次郎左衛門本願寺より拜領せし像にて、守本尊とし持ちたる處、後兵亂の爲に松田が家滅亡せしに、仲間の六右衛門といへるもの、松田が妻子を扶けて越中國へ逃げ退き、數年経て後六右衛門は侍と成る。太子像は、田井村の道場坊へ贈り與ふ。此道場坊、今は一ヶ寺となりて善行寺と名乗り、毎年二月廿二日彼像を開帳して、男女參詣人群をなしぬ。といへり。又飛耳棟録には、松田次郎左衛門米泉の洲崎兵庫に謀られ横死せし一亂の時、松田が馬捕三右衛門六右衛門、主君の守本尊也とて、松田が妻子と共に携へ、越中荒木と云ふ所へ落行き、名を荒木六兵衛と改稱す。利家卿六兵衛を召出されし時、此尊像をば松田が後室より譲り與へたれど、六兵衛つくづくおもふやう、梵刹の靈像俗家に置くは恐れなりとて、則田井村の道場へ收め、今に傳れり。此像は太子の御直作にして、誠に古き靈像なり。といへり。三州名蹟誌には、昔田井村の田、

中に井あり。此井中より、聖徳太子二歳の木像出給ふ。依りて田井村と號す。折ふし此邊の田の中に、三四歳許の小兒遊び居り、何れの子とも知りたるものなし。此像今に道場に安置す。との傳説を載せたり。此の傳説は、全く後世附會の俗諺にて、妄誕取るに足らずといへども、参考の爲め記載す。

○田井古池

此の池は寶幢寺の舊地にあり。昔田井の村落及び田井天神小將町邊にありし頃の舊蹟なりといへり。此の池寶永元年に寶幢寺上野へ移轉の後は、奥村氏の邸内と成りたりとぞ。故に加邦錄にも、田井天満宮の舊社地は、石川門外奥村伊豫屋敷の内に池あり。此所舊蹟と云ふ。田井村も其頃は劔先辻邊にありて、家數百戸許ありしといへり。但し天満宮の舊社地といふ事、彼の社記には所見なし。おもふに三州名蹟誌に、昔田井村の田の中に井あり。此井中より聖徳太子二歳の木像出でたり。故に田井村と號すと見ねたる田の中の井は、若しくは加邦錄にいへる古池と同池ならんか。池を井とも云へるは、性靈集に載せたる大和國益田池

の碑文に、地是漢語之舊宅。號則村井之故名也。とあり。石原正明の年々隨筆に、井といふは田にまかす料の水の事也。飛鳥井もをか井も數々の某井も、みな此渠と池との事なるを、近き世の先達は、井を掘井戸のみの事と心得たりと、委く論註せり。

○霞之瀧

寶幢寺坂の傍なる小瀧をいへり。古老曰く、此の瀧は、從前は辰巳用水の捨水をば此の所へ落したり。文政六年竹澤殿造營以前は、寶幢寺坂甚だ狭き道路にて、その坂道深山の樵道の如く、山崎山の古景を致し、坂脇なる谷へ落する瀧水の餘勢、霞の如く立上りけるを以て、世人霞の瀧と稱し、其の風致を賞せしかど、道路を取廣められ、今の如く成りたるより、山崎山の古景を失へりと云々。

○八坂

加邦錄に、寶幢寺坂邊に松田次郎左衛門居城を構へ居たる頃、八坂道は馬場跡なりといへり。今世人寶幢寺坂を指して八坂といふは誤也と。又一説に、八坂は寶幢寺坂より村木町へ出づる河岸の小坂を云ふ名なりといへり。按ずる